

ヘミングウェイと西部のメキシコ人

——「賭博師と尼僧とラジオ」に見る メキシコ人表象と革命運動*

本 莊 忠 大

1. はじめに

『スクリブナーズ・マガジン』(*Scribner's Magazine*) の1933年5月号に「医師よわれらに処方箋を与えたまえ」(“Give Us a Prescription, Doctor”)と題して掲載され、短編集『勝者には何もやるな』(*Winner Take Nothing*)において題名を変更して収録された作品「賭博師と尼僧とラジオ」(“The Gambler, the Nun, and the Radio,” 1933)は、アーネスト・ヘミングウェイ(Ernest Hemingway, 1899-1961)のアメリカ西部を舞台とした数少ない短編小説のひとつである。この物語創作の契機は、彼がモンタナで送った入院生活だった。1930年11月1日、ヘミングウェイは友人のジョン・ドス・パソス(John Dos Passos)およびフロイド・アリントン(Floyd Allington)とともに、モンタナ州クックシティ近郊のノードキスト牧場で釣りや狩猟を楽しんだ後、キーウエストへの移動中、自らの車を運転中に交通事故を起こし、右腕を斜めに螺旋骨折するという重傷を負った。その後、ピリングスにある聖ヴィンセント病院で手術を受け、7週間入院した後のクリスマス直前に退院している。この入院期間中、利き手である右腕が不自由で執筆も不可能な状態にあった彼にとって、廊下を隔てた向かい側の病室

* 本稿は、2020年9月19日に開催された日本アメリカ文学会北海道支部第194回研究談話会(オンライン開催)において研究発表した内容に、少なからず加筆・修正を施したものである。当日、司会を務めてくださった本村浩二先生をはじめ、発表の内容に有益な質問、コメントをいただいた皆様に記して感謝申し上げます。

に入院したメキシコ人や彼の友人たちとの交流は、退屈さを紛らわせる楽しい時間になったようである (Reynolds, 1930s 52-55)。そしてこのときの体験は、ヘミングウェイ自身がピリングスでの長期滞在を巡る本当の話であると述べた (Warren 52) 短編「賭博師と尼僧とラジオ」に色濃く反映されている。

この物語の背景を成す伝記的、ひいては歴史的状況を辿りながら作品分析を行った数少ない批評家の一人であるサラ・ドリスコル (Sarah Driscoll) は、ヘミングウェイが1930年11月22日付でアーチボールド・マクリーシュ (Archbald MacLeish) に宛てた手紙に見られるメキシコ人との交流の様子を踏まえ、特に西部に暮らすメキシコ系移民の生活様式に深く関心を持っていたと推定している (74-75)。そしてアメリカ社会に蔓延していた人種主義の文脈において「賭博師と尼僧とラジオ」に登場するメキシコ系移民の描かれ方を中心に分析し、作者ヘミングウェイを巡って、“he is deeply committed to telling the stories of a Mexican community in the West and its struggles for survival amid a racist and provincial Montana” (82) と指摘している。一方でマシュー・ニッケル (Matthew Nickel) は、熱心なカトリック教徒として活動していたヘミングウェイの伝記的背景を辿る一方で、思想や感情共有の視点から作品分析を行っている。さらに彼はフレイザー (Frazer) とメキシコ人との間で交わされる会話の内容をメキシコ革命期の政治的および宗教的文脈において読み込み、“Through Mr. Frazer’s meditation, Hemingway’s story offers one of his first examinations of the bloody crossroads where politics and the Church meet” (157) と指摘している。しかしドリスコルやニッケルの研究は、フレイザーとメキシコ人との間に見られる特異な異人種間関係の様相には触れていない。しかも作者ヘミングウェイのメキシコ革命を巡る独特の見解と密接に結びついたメキシコ人意識を巡る分析に関しては、等閑に付されたままである。

そこで本論では、メキシコ革命運動およびアメリカにおけるメキシコ系移民を巡る歴史的背景を準拠枠として、フレイザーとメキシコ人との交流や連帯とその限界に着目しながら物語を再読する。そして「賭博師と尼僧とラジオ」に描き出された複合的なメキシコ人表象の特殊性を究明することによって、新たに見えてくる作品の様相のみならず、従来は伝記研究においても看過されてきたヘミングウェイのメキシコ革命観を浮き彫りにし

たい。

2. メキシコ革命運動およびアメリカにおけるメキシコ系移民を巡る歴史的背景

メキシコ革命は、35年に渡るポルフィリオ・ディアス (Porfirio Díaz) による独裁体制の打倒を目指したフランシスコ・イグナシオ・マデロ・ゴンサレス (Francisco Ignacio Madero González) による1910年の武装蜂起に始まったと考えられている。当時の抑圧的な政治のみならず、土地所有形態の激変や大量に流入していた外国資本による経済発展は、富を一部の特権階級に集中させることとなり、貧困かつ不自由な生活を強いられた多数の国民による不満が蓄積していたのだ。またこの革命に見られた特徴のひとつは、反教権主義運動だった。そもそもメキシコは、19世紀初期にスペインの植民地支配から独立を達成したものの、植民地時代にメキシコを支配したカトリック教会から権力や特権を奪い去ることができなかったのだ。まずそれを実現したのは、1854年に始まったレフォルマ革命だった。またメキシコ革命は、この革命をさらに強化して政教分離を徹底し、カトリック教会の宗教としての機能以外となる経済的・社会的影響力を国民生活から排除することを目指している。そのためメキシコ革命は、狭義ではその理念や目標を盛り込んだ革命憲法が1917年に制定されたことによって終了したと考えられている (国本、『世界史』1-4)。

この憲法はカトリックに関する規定として、宗教団体や聖職者による学校の設立と監督を禁止する (第3条) とともに、修道会の存在を否定し (第5条)、信教の自由を明文化している (第24条)。さらに宗教団体による不動産の所有を禁止し (第27条第2項)、宗教事項に関する国家の介入権を詳細に規定している (第130条) (49)。ちなみに、革命が始まった1910年に行われた国勢調査によると、当時のメキシコ国民1,516万人のうち約99.2%がカトリック信者だったという (国本、『カトリック』121)。つまり教会や聖職者に敵対し、革命後の政治体制を確立させた護憲派勢力もまたカトリック信者によって構成されていたことになる。このような背景もあり、革命憲法は宗教団体および聖職者の行動を制限したものの、カトリック信仰そのものを否定することはなかった。

このような反教権主義運動に見る背景の詳細は、ユカタン州出身の弁護士ロドルフォ・メネンデス・メーナ（Rodolfo Menéndez Mena）による著書『メキシコにおいて聖職者が行ったことと宗教的迫害』（*The Work of the Clergy and the Religious Persecution in Mexico*, 1916）に見出すことができる。この著作は、反革命勢力が護憲派＝メキシコにおける宗教の迫害者というイメージをアメリカ人の間に流布させたことに対する反論をまとめたものである。まずメネンデスは、護憲派が戦っているのは、宗教としてのカトリックではなく聖職者であり、彼らが歴史的に行ってきたことや今なお関与しようとしている内容について、正確に深く知る必要があると主張している（3-4）。そしてスペイン人によって植民地化された時代に遡って、聖職者の歴史を概観しながら、彼らが先住民を無知な状態に押しとどめ（7）、白人女性を家庭内に制限し、多くの時間を子どもたちと一緒に多種多様な聖像崇拝に向かわせたこと（8）、また改革法を意に介することなく、メキシコ人を神学校や教会組織から締め出し（19）、国民の祝日に加えて宗教上の祝日を設定して、過度な飲酒や闘牛、低俗な娯楽を誘発し、メキシコ人を怠惰な状態に陥れたことも批判的に取り上げている（21）。さらにメネンデスは、聖職者が貧しい人々や女性を欺き、告解という手段を通して、あらゆる道徳的観念を歪曲したり、宗教上の祝祭によって人々を搾取するべきではないなど、項目を列挙しながら厳しく糾弾している。そして結論において、彼は再びアメリカ人が護憲派の姿勢と行動の背景にあるメキシコ史の特殊性を考慮に入れる必要性を力説している（28-31）。まさに国本伊代も指摘するように、護憲派軍が教会や聖職者に対して残虐の限りを尽くした理由の一つは、長年に渡って蓄積された彼らに対する不信と憎悪の深さと関係があったことがわかる（『カトリック』153）。

一方で、カトリック教会と保守勢力は、革命憲法の宗教に関わる条項を承認せず、その修正を求めて激しく抵抗し続けた。やがて20年にアルバロ・オブregon・サリド（Álvaro Obregón Salido）が大統領に就任すると、革命憲法が唱える反教会主義の風潮が強まったこともあり、カトリック勢力と革命政府との戦いは続いた。この対立は1926年から29年にかけて展開されたクリステーロの乱¹に結びつき、メキシコ人同士が殺し合う凄惨な宗教戦争に発展した（大垣 211-12）。1929年6月21日にメキシコ政府とカトリック教会は、共同声明文を発表して正式に和解している。しか

し30年代前半になると、教会の不動産は国家によって次々と接収され、その支配下に置かれることとなった（国本、『カトリック』232, 239）。このような強制的措置に対する反動として、地域によっては第二次クリステロの乱と呼ばれる武装蜂起が発生している（国本、『世界史』63）。そのため、メキシコ革命は広義では、ラサロ・カルデナス・デル・リオ（Lázaro Cárdenas del Río）大統領が1940年に退位するまで継続したと考えられている。というのも、彼の在任期間中に政府と教会の双方が歩み寄り、両者の対立が1938年までに沈静化していった（国本、『カトリック』237-39）ほか、カルデナスは政治体制として諸勢力の利害を調整する仕組みを取り入れ、農地改革を全国規模で進めたほか、1937年と38年にそれぞれ鉄道と石油産業の国有化を断行したからである（国本、『世界史』1, 68-73）。

ところで、メキシコ革命が勃発した1910年以降、アメリカに入国したメキシコ系移民の数は劇的に増加し、20年には65万人を超えている。しかも彼らは、1917年の移民法で定められた識字テストを免除されたほか、24年の移民法もメキシコ系移民数を限定しないなど、アメリカ移民管理政策において受け入れ制限枠の適用から除外されていた（中野100）。またビート産業はメキシコ系移民に新たな仕事の機会を提供している。この傾向は特に西部において顕著であった。1897年に成立したディングレー関税法が外国産の砂糖に高関税を課したため、ビート生産量が1899年の793,000トンから1929年には700万トンへと増産され、労働力不足を補う必要があったからである。そして33年にはメキシコ人のビート農場労働者数が55,000人に上っている（Balderrama 19-20）。しかしメキシコ系移民は、移住先のアメリカにおいて市民あるいは移民の区別なく、階級的にはアメリカ人より下位に位置付けられる従属労働者として見なされていた。

しかも彼らにとって不利なことに、1929年に制定された移民法では、移民局が規定した正規の手続きを経由せずにアメリカに入国した者に対して罰則が科せられることとなった。その実践的効果は、移民局主導のもとで展開された強制送還キャンペーンにおいて発揮されたという（三浦32）。当時、農業の分野において働くメキシコ系移民の大半は非合法でアメリカに入国していたため、低姿勢を維持しようと努めたものの、1929年から35年にかけて、推定で約40万人がメキシコに送還された（ゴンサレス 280-81, 263）。またメキシコ系移民の国外追放手続きへと頻繁に結びついた例のひ

とつは、罪を犯したと告発されたケースだった。しかも大部分のメキシコ系移民は、弁護士を雇う経済的余裕がなく、自らに向けられた告発に対して無罪であっても、裁判において勝訴する見込みはほとんどない状況下に置かれていた (Balderrama 65)。

その一方で、メキシコ人は精神的、身体的、かつ文化的にも欠陥があり、標準未満の人間として分類され (21-22)、労働に対する嫌気や怠慢、野望の欠如が、頻繁にメキシコ文化の特徴であると考えられたほか、メキシコ人は即座の自己満足を抑えられず、浪費家でその欲望は子どものようだという主張さえ行われた (41-42)。しかもメキシコ人は、地域社会の犯罪率を上昇させるほか、教育水準を低下させ、スラムを形成する移民として、非難的となっていった。このような捏造された「メキシカン問題」は、戦間期を通じて全米の新聞でよく目にするテーマとなり、当時広く読まれていた『サタデー・イブニング・ポスト』(*The Saturday Evening Post*) 紙は、反移民運動の先頭に立っていたという (ゴンサレス 260)。メキシコ革命から逃れ、新天地アメリカに移住したメキシコ人も、当初は労働力として歓迎されていたものの、やがてはスケープゴートとして意図的に問題視される傾向が顕著に見られるようになった。こうして彼らは、排除すべき劣等な人種の他者として認識されるようになったのだ。

3. フレイザーが抱くメキシコ人への親和感情と連帯意識

アメリカ社会において幅広く見られた異質で劣等な人種としてのメキシコ人像は、「賭博師と尼僧とラジオ」に登場するフレイザーとメキシコ人との関係性においては特異なかたちで反映されている。まずは、フィクション化によって浮き彫りにされるフレイザーが抱くメキシコ人意識の側面を探ってみたい。

「賭博師と尼僧とラジオ」において病院に運び込まれてくるメキシコ人とロシア人のモデルは、それぞれビート農場労働者のマーティン・コステロ (Martin Costello) とアレック・ヤック (Alec Youck) である²。彼ら二人はカフェ・スリタで見知らぬ襲撃者によって銃撃される。このときヤックは太腿を撃たれたものの重症ではなかった。またコステロは腹部を貫通した弾丸が原因で命を落とす可能性があったほか、この銃撃事件について口を

閉ざし続けていた。一方で警察官は、3年前に弾丸がコストロのコートの袖を引き裂いたのみならず、彼と一緒に歩いていた少女の腕を負傷させたことを思い起こしたという。というのも、彼はその際にも銃撃者の名前を告げることはなかったからである。そしてヘミングウェイは、看護師からコストロの容態のみならず、銃撃者の名前に関する彼の黙秘について定期的に聞いていた (Reynolds, 1930s 54-55)。

一方で物語においては、ビート農場労働者であるロシア人とトランプのギャンブラーであるメキシコ人カイェターノ・ルイス (Cayetano Ruiz) が、終夜営業のレストランでコーヒーを飲んでいると、そこにやってきた男がカイェターノに向かって発砲する。弾丸は彼の腹部に二発命中する一方で、流れ弾がテーブルの下に逃げ込んだロシア人の太腿に当たっている (“Gambler” 353)。またカイェターノは、コストロを想起させるかのようになり、病院に事情聴取にやってきた警察官に、自らを狙撃した犯人について打ち明けようとはしない。ここまでの内容は、実際の銃撃事件を巡る概略とほぼ同様である。

しかし、物語へと虚構化された時点で浮き彫りにされる特徴のひとつは、スペイン語を理解できない警察官による捜査の続行を阻止するために、通訳とフレイザーがともに協力している点である。そもそもフレイザーは作家であるが、落馬して骨折したため入院している。また彼は通訳と同様に、スペイン語を自在に操る能力を持ち合わせている。警察官による質問に対して、カイェターノは “An accident that he hit me at all, the *cabrón*” (353) と話すものの、このとき通訳は “He says it was an accident” (354) と警察官に伝え、その後カイェターノが事実について話すことを拒否すると、通訳は彼が犯人については知らないこと、そして背中を撃たれた点のみを伝えている。しかも警察官がカイェターノに正面から弾丸が命中していることを不自然な点として指摘すると、通訳はカイェターノを介することなく、“Maybe he is spinning around” (354) と即答している。一方で、警察官から通訳と交代して犯人の名前を聞き出すよう依頼されたフレイザーは、カイェターノとの会話を終えると、具合が悪いため尋問を後にしてほしいという彼の希望とともに、実際には聞いていないにもかかわらず、カイェターノは自らを狙撃した犯人について不明だと話している、と警察官に伝えている。そして背中を撃たれたと思うかどうかについての警察官からの質問に、彼は

通訳と歩調を合わせて、“Somebody shot him in the back. What’s it to you?” (355) と伝えている。テキスト上はほぼ全ての会話が英語で表記されているものの、カイェターノと通訳およびフレイザーの間では、警察官が理解できないスペイン語で会話していたと考えられる状況からも、犯人が判明しない状況が意図的に創り出されているように思われる。

このように、彼ら3人が暗黙の了解であるかのように、警察官による尋問に協力しない背景には、メキシコ人を巡る優劣の意識に呪縛された警察官の姿勢を批判的に浮き彫りにしようと試みる作者ヘミングウェイの人種意識が潜んでいると考えられる。そもそもこの警察官は、フレイザーには対等な立場で仲間意識を醸し出しながら、“I wish I could talk spick” と話しているほか、フレイザーが“Why don’t you learn?” と述べると、彼は“You don’t have to get sore. I don’t get any fun out of asking that spick questions. If I could talk spick it would be different” (356) と答えているように、ヒスパニック系アメリカ人に対して向けられる侮蔑的な語“spick”を使用することにより、カイェターノを劣等な人種的他者として認識していることがわかる。それゆえ、カイェターノと通訳およびフレイザーの間に見られる協力関係によって警察官を孤立させる物語展開は、まさにヘミングウェイによる人種主義や偏見を巡る批判のみならず、アメリカにおいて英語のみの使用に固執する人々に対する風刺 (Driscoll 77) としても読めるだろう。

またヘミングウェイは、あえて対等な立場で連帯を図るフレイザーとメキシコ人の姿を描き出そうと試みていたと思われる。というのも、ここまで検証してきた物語展開に加えて、カイェターノはフレイザーに対して、警察官による尋問の際とは一転して、自らを銃撃した犯人からカードで38ドルを勝ち取ったこと、そして運に見放されているため、いざまとまった金が入るとギャンブルをして負けること、また長生きをすれば運が変わるので、裕福になったら存分に楽しむこと、そして町を転々と渡り歩きながら、一からやり直すことに至るまで、自らの現状と将来計画についても率直に伝えているからである (“Gambler” 366-67)。もちろん、このようなカイェターノによる説明は、彼自身が創作過程においてモデルとなったコストロ、つまりビート農場労働者からカードのギャンブラーへと設定変更されたことに加えて、メキシコ人を巡る恣意的に捏造されたステレオタイプのイメージに結びつくだろう。しかしフレイザーは、このようなメキシ

コ人像を意に介することなく、カイェターノと親密な交流を維持するほか、警察官に自らが得た情報を伝えることもない。

フレイザーと親密な関係を築くメキシコ人は、カイェターノに留まることはない。同様の異人種間関係は、名前を与えられず、体型のみによって説明されるメキシコ人3人とフレイザーとの交流においても見てとることができる。彼らはコストロを見舞いに訪れるメキシコ人が彼の友人であることとは対照的に、カイェターノを銃撃した男の友人たちである。そしてフレイザーがモンタナ州レッド・ロッジ産のアルコールを振る舞うと、話題はその質や値段、ビッグ・ティンバー産との比較、さらにフレイザーの病室にあるラジオに使用されている真空管の数や値段にまで及ぶ。また彼らはカイェターノが友人のいないカードのギャンブラーであり、最も小柄なメキシコ人からは180ドルを、そして細身の男からは211ドルを勝ち取ったものの、現在は貧困に喘ぐ状況にあることや、カイェターノを銃撃した男はギターの名手であったが、街を出て行く必要があったことについてフレイザーに伝えている(360-62)。ドリスコルはこの場面を巡って、“Hemingway suggests here that the Mexican community in Montana is fragmented by its own poverty, ... The mourning of the beet worker’s departure suggests the loss of Mexican culture at the expense of American values” (79) と指摘している。

しかし、メキシコ系移民を巡る歴史的背景を踏まえると、ここまでの物語展開には、メキシコ人コミュニティにおいて残り続けている確かな協調の様子も見てとることができる。先にも触れたように、カイェターノは自らを銃撃した犯人について、フレイザーには真相を伝えるものの、警察官に対しては頑なに沈黙を守り続けている。しかも3人のメキシコ人たちは、警察に依頼されて初めて病院を訪れるほか、フレイザーに自らの名前を一切伝えないほどの慎重さを見てとることができる(“Gambler” 361-62)。さらに原稿の段階で削除された一節では、シスター・セシリア(Sister Cecilia)がカイェターノの見舞客のみならず、彼の具合について尋ねる人もいないことに触れている(376)。このようなメキシコ人たちの行動の背景には、告発に結びつく銃撃事件の隠蔽、つまり彼らにとって不都合な事実に基づいたメキシコへの強制送還を回避しようと試みるメキシコ人コミュニティにおける強力な連帯意識が潜んでいるのではないだろうか。と同時に、カイェターノを銃撃した犯人についてのみならず、病室を訪問したメキシコ

人たちから得た情報について警察官に伝えないフレイザーには、アメリカ社会における生き残りをかけた彼らのコミュニティ意識を理解し、それに協力する親和感情を読みとることができるだろう。

物語においてカイェターノに有利となる立場を貫くフレイザーを描き出した背景には、犯人の名前について黙秘し続けるコストロの姿に、同郷のメキシコ人が罪を告発され、アメリカから国外追放されるという当時の彼らが直面していた社会的状況との関連性を見てとった作者ヘミングウェイの慎重な配慮が潜んでいると考えられる。それではフレイザーは、なぜカトリックとメキシコ革命に話題が及ぶと、最終的にメキシコ人との相互理解を阻む心理的な壁を構築するに至るのだろうか。次にフレイザーとメキシコ人との連帯意識が変化する様子を探ることによって、フレイザーが抱くメキシコ人意識を巡るもうひとつの側面に迫ってみたい。

4. 反革命意識とアヘンとしての宗教

メキシコ革命運動を巡る歴史的背景を基に、フレイザーとメキシコ人との間で交わされる会話を辿っていくと、負傷した脚の神経の状態が良好な間、フレイザーは病院を訪れるメキシコ人に親密な意識を抱く一方で、彼らとの意見の衝突を慎重に回避しているように思われる側面もある。しかし物語の後半以降において、神経の状態が悪化すると、フレイザーとメキシコ人との交流や連帯は齟齬をきたすこととなる。メキシコ人がビールを持って病院にやってきたとき、フレイザーは彼らに会うものの、話したい気分にはならないばかりか、彼らが病室を去ると、もう二度と訪れてこないだろうとさえ考えているのだ(364)。しかも物語結末部では、アヘンの捉え方を巡る細身のメキシコ人との見解の相違を通して、フレイザーの反革命意識が浮き彫りにされている。

フレイザーとメキシコ人との間でシスター・セシリアに話題が及ぶとき、彼らの友好関係は不穏な状況へと変化している。病室にやってきた細身のメキシコ人は、フレイザーに“Is she a little crazy?”と尋ねる。するとセシリアとは気軽に会話を楽しむ打ち解けた関係にあるフレイザーは、“She is a fine woman of great intelligence and sympathy”(362)と褒め称えるものの、細身のメキシコ人は、革命政府の主張に沿うかのように、司祭や修道士、

尼僧をすべて信頼していないほか、自らがかつては侍者だったものの、何も信用していない現在はミサにも行かないことを表明している。また最も小柄なメキシコ人は、聖職者を信用していないと語る細身のメキシコ人について補足説明するかのよう、彼が少年の頃、不快な体験を味わった点をフレイザーに伝えている (362)。その詳細は不明であるが、この細身のメキシコ人は、多くのメキシコ人男性にとって自堕落な存在でしかなかった聖職者 (国本、『カトリック』153) を憎悪するに至っていたのではないだろうか。

しかも細身のメキシコ人は、“Religion is the opium of the poor” とさえ自らの信念を吐露している。この後フレイザーは、細身のメキシコ人が宗教に激しく反発している点を巡って、“It is necessary to be very strong against something” と丁寧述べるほか、細身のメキシコ人が“I respect those who have faith even though they are ignorant” と伝え、フレイザーは“Good” と述べるにとどまっている (“Gambler” 363)。つまり彼は、細身のメキシコ人にあえて反対意見を表明することなく、中立の立場を維持しているのだ。セシリアを好意的に捉えているフレイザーは、聖職者を嫌悪する細身のメキシコ人との意見の衝突を意図的に回避していると考えられる。

しかし、物語の終盤に差し掛かり、メキシコ革命に話題が及ぶと、フレイザーと細身のメキシコ人との間では正面から意見が衝突している。病棟に演奏にやってきたメキシコ人からリクエスト曲を求められたフレイザーが、メキシコ革命期に幅広く聞かれたピリャ軍の陽気な愛唱歌であるラ・クカラチャ (渡辺 218) を依頼すると、彼らはにぎやかに感情を込めて演奏する (“Gambler” 368-69)。するとフレイザーは、細身のメキシコ人が話していたセリフ、“Religion is the opium of the poor” (363) について考え始める。ちなみにこのフレーズは、カール・マルクス (Karl Marx) が論文「ヘーゲル法哲学批判序説」 (“Zur Kritik der Hegelschen Rechtsphilosophie. Einleitung” 1844) において使用した文言に酷似している。彼は唯物論者の立場から宗教を巡って、「抑圧された生きものの嘆息であり、非情な世界の心情であるとともに、精神を失った状態の精神である。それは民衆の阿片である」と指摘している。また彼は宗教が「人間の**本質が真の現実性をもたないがために、人間の**本質を空想的に実現したものである****」ため、「宗教に対する闘争は、間接的には、宗教という精神的芳香をただよわせている

この世界に対する闘争なのである」とも述べている (72)。マルクスは当時、鎮痛剤としても使用されていたアヘンを比喩的に用いることにより、宗教に依存せざるを得ない社会を批判しているのだ。

物語においてフレイザーがマルクスによる宗教批判に思慮を巡らせているかどうかについて読みとることは不可能だが、彼はマルクスと同様に、宗教をアヘンのひとつとして考えている (“Gambler” 369)。しかも同時に彼は、アンベリーズ・R・ホイットル (Amberys R. Whittle) が指摘しているように、アヘンとしての宗教に対して革命家が抱く憎悪について、賛意ではなく、怒りを込めて思い起こしていると考えられる (285)。というのも、その後フレイザーは、細身のメキシコ人からラ・クカラチャが本当の革命の曲であると説明を受けると、彼に対して宗教というアヘンを否定し、新しい社会体制の確立を目指したメキシコ革命を暗示させる質問、つまり “Why should the people be operated on without an anaesthetic?”、さらには “Why are not all the opiums of the people good? What do you want to do with the people?” (“Gambler” 370) を投げかけているからである。一方で、そもそも信仰心を抱く人々を無知だと考えていた細身のメキシコ人は、“They should be rescued from ignorance” (370) と答えている。しかも彼は、教育を人民のアヘンとして捉えているフレイザーとは、全く意見を異にしている。そもそも「何も信用していない」とフレイザーに明言していた細身のメキシコ人は、自らの論理破綻を示すかのように、革命そのものについては躊躇うことなく信用しているのだ (Whittle 285)。こうして細身のメキシコ人の姿は、皮肉にも彼の言動を巡る矛盾を突かれるかたちで描出されている。と同時に、アヘンは革命を巡るフレイザーと細身のメキシコ人との対照的な姿勢を浮き彫りにするための装置としても機能していることがわかる。

5. 革命小説としての共通性と特異性

細身のメキシコ人に特徴的に見られる盲目的な革命家を風刺するヘミングウェイ作品は、「賭博師と尼僧とラジオ」に留まることはない。1925年に出版された短編「革命家」(“The Revolutionist”) に登場するハンガリー人の革命家は、1919年3月にハンガリー革命が起こるとともに誕生したハン

ガリー・ソビエト共和国において、8月には海軍提督ミクロシュ・ホルティ (Miklós Horthy) による反革命が起こり、共産主義革命家たちが徹底して弾圧されたときの犠牲者の一人として登場する。とはいえ、彼は世界革命を全面的に信じており、語り手がイタリアにおける革命運動の状況悪化を伝えた際にも、彼は“*But it will go better, ... You have everything here. It is the one country that every one is sure of. It will be the starting point of everything*” (119) と話しているように、革命の成功を信じて疑わない。ヘミングウェイがこの作品を執筆した時期は、1923年6月末あるいは7月である (Smith 30) が、物語が出版された当時の作者ヘミングウェイのみならず、読者もまた前年の22年にベニト・ムッソリーニ (Benito Mussolini) が政権の座に就き、ファシズムが蔓延するイタリアの政治状況について知っていたはずである。この物語には共産主義革命の失敗をアイロニカルに浮き彫りにする作者の戦略を見てとることができるだろう。

一方で、長編小説『持つと持たぬと』 (*To Have and Have Not*, 1938) は、1930年代当時のキューバにおける混乱した革命運動の状況を反映している。革命に必要な資金を調達するためにキーウエストで銀行強盗を行った理想主義者エミリオ (Emilio) は、キューバに向かう船上で、革命の目的は不愉快な手段を正当化することだと主張している。そして彼はハリー・モーガン (Harry Morgan) に対して、革命家の一人ロベルト (Roberto) が正当な大義名分の下で殺人を犯したのだと説明している (158)。しかしハリーは、革命家たちとは対照的に、彼らの過剰な暴力を許さないばかりか、どのような大義があろうとも、罪のない労働者を殺害する弁解を容認しない姿勢を貫いている (168)。革命のために打ち立てた大義名分を疑うことなく行動する革命家たちを痛烈に批判しながら展開するこの物語は、キューバ革命運動の異様な内情を告発する小説でもある。

ヘミングウェイの革命家に向けた冷淡な眼差しや物語に見られる革命表象の視点から分析すると、「賭博師と尼僧とラジオ」もこれらの作品と同列に位置付けられるだろう。しかしこの物語に見る特異な点は、カトリック教会や聖職者を敵対視した護憲派に対する作者の批判的姿勢が浮き彫りにされる一方で、フレイザーが考えるアヘン、すなわち宗教やラジオ、ギャンブルに依存する登場人物たちが共感や同情の眼差しとともに描き出されることもない点である。彼らの置かれた現状は好転することなく、希望が

叶うこともないのだ。

セシリアは素朴で信仰心の厚いシスターである。彼女はモデルとなったシスター・フローレンス・クルーナン（Sister Florence Cloonan）と同様に、過度な興奮を予防するべく病院の礼拝堂で祈りながら、フットボールや野球の試合を熱心に応援している（“Gambler” 359-60）。しかしフィクション化に際しては、セシリアの届かない願望や祈りが浮き彫りにされている。彼女は聖人になることを強く望んでおり、この願望についてフレイザーの前で繰り返し話している（364-65）が、そもそも教皇庁が聖人として認定する列聖は、ある人の死後に生前の英雄的徳行を調査した後、福者の列に加え、さらに二つの奇跡がその福者の取り次ぎによって行われたと判断されたとき、教皇が公にその福者を聖人の列に加えると宣言するものである（ハードン 712）。物語において聖人になりたいと願うセシリアが、これらの条件を満たしていないことは明らかである。

ところで、1926年1月2日付でヘミングウェイがアーネスト・ウォルシュ（Ernest Walsh）に宛てた手紙には、次のような一節が見られる。

Although I am catholic have [sic] never had much admiration for martyrs or Saints. Mac is being made a martyr of, largely his own fault, no less largely the pressure of the world which is strong, and you are now engaged in making Mac a saint. One of the good things about the church, correct me if I'm wrong, is that they make a definite time limit before we can become Saints. To a real Saint that makes no bloody difference, any more than it makes a difference to a man, if he has really performed the act of valor, whether he is decorated or not. But it keeps out a lot of [Theodore] Roosevelts and [Woodrow] Wilsons. Of course on the other hand it lets in people like Jeanne D'Arc who were the shit of life but developed wonderful publicity organizations after their death. Still it's a good rule. (*Letters* 189)

つまりヘミングウェイは、カトリックの列聖を巡る手続きについての知識を持っていたことがわかる。それゆえ、セシリアの聖人になりたいという願望は、不可能なものとして意図的に設定されたのだと思われる。

しかも物語において、セシリアの熱心な祈りは不毛な結果に結びついて

いる。彼女はカイェターノの怪我の状態について常に気にかけており、フレイザーに毎朝彼の様子を伝えるとともに、病院の階下で回復のための祈りを捧げている。しかも彼女は、寡黙に痛みを耐えるカイェターノの孤独な状況を気遣い、警察本部に向いて、メキシコ人を彼の見舞いに派遣するように要請してもいるのだ。とはいえ、カイェターノは町を渡り歩きながらギャンブルに興じるという自らの希望に背くように脚の麻痺が発見されており、退院の目途すら立たない状態が続いている（“Gambler” 365）。セシリアがカイェターノのために熱心に捧げる祈りが届くことはないのである。

フレイザーも希望をもたらしことのない、いわゆるアヘンに依存する登場人物の一人である。彼は聖ヴィンセント病院に入院していた当時のヘミングウェイと同様に、夜になるとラジオを聴き始める。まずはデンヴァーの放送局から始まり、その日の放送が終了すると、さらに西に位置する別の放送局にチャンネルを合わせて、朝までラジオを聴いている。そして放送の内容から町の情景をイメージし、空想の世界に浸り続けている。有効な治療方法のないフレイザーにとって、ラジオは自らを仮想空間に誘い出してくれる現実逃避の手段でしかないのだ。

「賭博師と尼僧とラジオ」は、アヘンを通してフレイザーの反革命意識を炙り出すものの、その一方で彼が考えるアヘンに依存する登場人物たちが直面する現状に、変革もたらされることもない。つまりヘミングウェイは、メキシコ革命期における護憲派とカトリック教会派という相対立する勢力構図の中で、いずれの立場にも与しない中立性を維持する物語を描いているように見える。しかもこのような特異な側面には、ヘミングウェイ自身のカトリックを巡る特殊な意識も影響を及ぼしていると考えられる。そこで次に、宗教的な視点から彼の伝記的背景、そしてこの作品と同時期に出版された短編「ワイオミングのワイン」（“Wine of Wyoming,” 1933）について検証することにより、「賭博師と尼僧とラジオ」に見られる革命小説としての特異性についてさらに究明してみたい。

6. 主に伝記的背景から見たヘミングウェイの宗教意識

マイケル・S・レノルズ（Michael S. Reynolds）は、第一次世界大戦中の

前線応急手当所におけるヘミングウェイとカトリック神父との出会いを巡って、“That night in the battlefield dressing station, when the priest absolved him of all his sins, anointing his forehead with holy oil, was an intense moment” (*Paris* 346) と指摘している。実際にヘミングウェイがウォルシュに宛てて書いた返信書簡に見られる次の一節には、レノルズの指摘を補強するヘミングウェイの体験談のみならず、彼がカトリックを信仰していた点を見出すことが可能である。

If I am anything I am a Catholic. Had extreme unction administered to me as such in July 1918 and recovered. So guess I am a supercatholic.... It is most certainly the most comfortable religion for anyone soldiering. Am not what is called a “good” catholic.... But cannot imagine taking any other religion seriously. (Reynolds, *Paris* 345)

この手紙に見られる “Am not what is called a ‘good’ catholic” とは、『日はまた昇る』(*The Sun Also Rises*, 1926) においてジェイク・バーンズ (Jake Barnes) がパンプローナの寺院で独白する “I was such a rotten Catholic” という自嘲的な独白を想起させる。しかし彼は、カトリックを “a grand religion” であり、敬虔な気持ちになることができればとも考えている (78)。ヘミングウェイのカトリックに対する考え方は、ジェイク自身のものとして作品に反映されているともいえるだろう。

また 1921 年 4 月にヘミングウェイは、婚約中のハドリー・リチャードソン (Hadley Richardson) にミラノの大聖堂で一緒に祈りを捧げてほしいと依頼している (Griffin 170) ほか、24 年 3 月 16 日に行われた長男ジョン (John) の洗礼式に際して、カトリック教徒であるチンク・ドーマン＝スマス (Chink Dorman-Smith) を代父として選んでいる。さらに 27 年 5 月にポーリーン・ファイファー (Pauline Pfeifer) と結婚するに際して、ヘミングウェイは自らプロテスタントからカトリックに改宗している。

その後 1930 年代に入ると、ヘミングウェイは自らのカトリックへの厚い信仰心について、よりいっそう率直に表明するようになっていた。またキーウエストのイエズス会神父である F・X・ドハティ (F. X. Dogherly) によると、ヘミングウェイは日曜日のミサへの出席を欠かすことなく、イー

スターシーズン中には確実に聖体拝領を受けていた (Stoneback 131)。しかも彼はトーマス・マックグラス・S・J (Thomas McGrath S. J.) 神父と釣り旅行に出かけるなど、幾人かの神父たちと親密な友好関係を築いてもいた (Nickel 130)。その一方でヘミングウェイは、メキシコ革命期における護憲派勢力と同様に、宗教と政治が協力し合い影響力をもたらすことを嫌悪していた。たとえば、彼が1932年10月14日付でノードキスト牧場からドス・パソスに宛てた手紙では、“To hell with the Church when it becomes a State and the hell with the State when it becomes a church” (*Letters* 375) と述べている。また36年12月15日付でイエズス会修道士ハリー・シルヴェスター (Harry Sylvester) に宛てた手紙において、ヘミングウェイは“My politics have never been those of the Church and I think of my religion as something as private to me as my family” と伝えている。それゆえ、当時のヘミングウェイがカトリック作家と呼ばれることを拒否した理由のひとつが、特にスペイン市民戦争後に至るまでの教会と連携する政治の回避であることは十分に考えられるだろう (Nickel 131)。ヘミングウェイにとって、政教分離を不可欠なものとする信念は揺るぎないものだったことがわかる。

このようなヘミングウェイのカトリックを巡る考え方は、「ワイオミングのワイン」において、カトリック教徒を好意的に捉えながらも、彼らが政治的影響力を保持することについては拒絶する語り手の特殊な姿勢として描き出されている。フランスに住むカトリック教徒のアメリカ人である語り手は、同じカトリック教徒で、家計の補助として良質のビールやワインを安価で販売しながら生活を送るフォンタン (Fontan) 夫妻と親密な交流を図っている。とはいえ、当時のアメリカでは禁酒法が施行されており、サム・フォンタン (Sam Fontan) は、警察に二度、役所に一度逮捕され、刑務所へ送られたほか、罰金として755ドルを課されている。そしてこの事実をフォンタン夫人の不満として打ち明けられると、語り手は禁酒法に対する異議を唱えるかのように彼女に同情している (348)。

ところで、この禁酒法制定の背景には、主に飲酒の習慣をアメリカへ持ち込むカトリック教徒の新移民を敵対視した旧移民によるネイティヴィズムが潜んでいた³。このような新移民に対する閉鎖的な社会風潮は、フォンタンのいとこの子どもが語る言葉に暗示されている。彼女はフォンタン夫

人に対して、“It’s not good to be catholic. The Americans don’t like you to be catholic. It’s like the dry law” (347) と述べている。この彼女のセリフは、まさに個人の道徳的問題に介入する禁酒法自体を嫌悪するものの、その背後に潜んでいた反カトリックの姿勢には賛成するという数多くの旧移民に見られた矛盾する姿勢を示唆しているのだ。

しかしフォンタン夫妻はプロテスタントの主流文化に同化することなく、当時のアメリカでは拒絶の対象であったカトリック教徒として信仰を守り続けている側面が浮き彫りにされている。こうして彼らは禁酒法に違反する犯罪者となりつつ、この法律に秘められたアングロ・サクソン系プロテスタント移民の意図にも真っ向から挑戦しているのだ。と同時に物語は、フォンタン夫妻を好意的に捉えて共に飲酒を楽しむ語り手の姿を描き出すことにより、禁酒法のみならずその背後に潜んでいた新移民のプロテスタント文化への強制的な同化あるいは排除という当時のアメリカに見られた旧移民の狭隘な人種意識を批判的に描いているかに見える。

しかし語り手は、カトリックと政治勢力が結びつくとき、たちまちにして旧来のアングロ・サクソン系プロテスタント移民側の立場に回ってしまう。語り手とフォンタン夫妻との会話において、カトリック教徒の大統領候補であるシュミット (Schmidt) が話題に上る。そしてサムが、“You think he’ll be the President?” (348) と尋ねると、語り手はシュミットの大統領就任の可能性をきっぱりと否定している。また帰途に就く車の中で語り手の妻が、フォンタン夫妻を巡って“I hope they have a lot of good luck” と述べると、語り手は“*They won’t, ... and Schmidt won’t be President either*” (353) と答えている。つまり語り手には、禁酒法制定にも見られる閉鎖的なアメリカ社会への失望というよりも、カトリック教徒が大統領に就任することによって政治的影響力を持つことを拒絶するカトリック教徒という特殊な姿勢を読みとることができるだろう。

ネイティヴィズムに基づいた反カトリックの風潮が蔓延していた当時のアメリカ社会において、語り手は禁酒法に異議を唱え、フォンタン夫人の不満に同調しながらも、カトリック教徒が政権を担うことは一貫して拒否している。つまり「ワイオミングのワイン」においては、首尾一貫して宗教と政治の完全な分離を志向する語り手の姿勢が浮き彫りにされているのだ。またこの物語に見る語り手の特殊な宗教意識は、メキシコ革命期にお

けるカトリック勢力に加担しないヘミングウェイ自身の姿勢として、「賭博師と尼僧とラジオ」の創作にも同様に反映されていると考えても不思議ではないだろう。

7. 「賭博師と尼僧とラジオ」に見るメキシコ人表象と革命運動

ヘミングウェイがピリングスにおいてメキシコ系移民との親密な交流を図りながら、自伝的な短編「賭博師と尼僧とラジオ」を構想していた当時、彼はメキシコ系移民がアメリカ社会において置かれていた特殊な状況に精通していたと思われる。しかも彼がメキシコ系移民に対して抱いていた親和感情は、物語において彼らが具体的に編み出した戦略のひとつを活写することに結びついたのでないだろうか。しかしメキシコ系移民との親交を深めるフレイザーは、メキシコ革命に触れるとき、やがては彼らとの間に心理的な壁を構築するという複雑怪奇な物語展開を辿っていることも事実である。その背景には、護憲派勢力を批判の対象として捉えながらも、カトリック教会が政治的影響力を持つことは嫌悪するというヘミングウェイ独特のメキシコ革命観が潜んでいると思われる。

フレイザーの反革命意識は、アヘンの捉え方を巡る細身のメキシコ人との対照性を通して、明確に浮き彫りにされている。その一方で、フレイザーがアヘンと見なす宗教を盲目的に信仰するセシリアやギャンブル（フレイザーが考えるアヘンのひとつ）によって生計を立てようと計画するカイェターノも、冷淡に突き放されて描出されている。特に出版前に削除された原稿の結末部は、このような側面を端的に物語っている。ここで語り手は、聖人になることを強く願うセシリア、そしてギャンブラーとして幸運に恵まれることを望むカイェターノを巡って、“I know nothing about whether either of their ambitions were ever realized. My leg got quite well and I left the hospital and the radio”と独白しているのだ。さらにこの後彼は、ピリングスに戻っていないことやラジオで周波数を合わせていた各放送局の所在地を訪れてもいないことを伝えている（“Gambler” 385）。

また鉛筆書きで追加されたもうひとつの結末部では、メキシコ人たちによる演奏の後、語り手による説明、“It was not logical nor was anything that happened in that hospital logical nor was the time I spent there wasted”が続い

ている。さらに語り手の独白は傍線で消された段落に続き、この部分は“*It is more than a question of health, or environment, or training, or heredity, or the state of the liver. It is, perhaps, a question of maintaining an interest. Assuredly it is not entirely to be explained by economics*” (386) で終わっている⁴。

このようないずれの一節にも、メキシコ革命を巡る中立的な立場ゆえに、最終的にヘミングウェイがメキシコ人革命家のみならず、宗教に依存するセシリアにも与することのない語り手を描き出さざるを得なかった創作上の苦悩が垣間見えるだろう。また出版された物語の結末部において、通常は可能な限り思考を避けているフレイザーは、再びアヘンについて思慮を巡らせた後、メキシコ人がラ・クカラチャとともに病院を離れたら、強い酒を少し飲み、そして頭を使わずに聞く方法を学びつつあった (364) ラジオに耳を傾けようとする。つまり彼は何ら活路を見出すことができないアヘンの中でも、宗教以外のものを用いながら、現実逃避を希求しているのだ。このような新たな帰着点もまた、ヘミングウェイ独特の革命観に起因する苦渋の創作だったように思える。とはいえ、「賭博師と尼僧とラジオ」はメキシコ革命を題材とする他作家の作品、例えば、カトリック教会堂で祈りを捧げ続けるとともに革命運動に協力する中で、自らの矛盾に気づき、外界との触れ合いを回避するアメリカ人ローラ (Laura) を描いたキャサリン・アン・ポーター (Katherine Anne Porter) の短編「花咲くユダの木」(“*Flowering Judas*,” 1930) や、アルコールに溺れるのみならず、私生児まで設けてしまう堕落した神父と宗教弾圧を描いたグレーム・グリーン (Graham Greene) の長編小説『権力と栄光』(*The Power and the Glory*, 1940) と並び、メキシコ革命の内情を巡る作者独自の鋭い観察眼に基づいて創作された物語としても無視できない重要性を有していると思われる。

注

1. クリステローとは、革命政府に対して“*Viva Cristo Rey!*” (“*Long, live Christ the King!*”) の旗印のもと、武器を取った熱狂的なカトリック教徒たちを指す。実際に1926年から29年まで2万5千人ものカトリック信者たちが政府軍と戦った。しかし革命政府の彼らに対する無慈悲な抑圧は、アメリカへの移民増に結びついたという (Balderrama 15)。
2. 地元紙の『ビルングス・ガゼット』(*Billings Gazette*) は、銃撃されたコストロをビート農場労働者として伝えている (Reynolds, 1930s 54) が、カーロス・

- ベイカー (Carlos Baker) は三流のギャンブラーとして (218)、またクリス・ウォレン (Chris Warren) はギャンブラーであると説明している (52)。
3. 禁酒法制定の背後に潜むネイティヴィズムについては、エドワード・ベア (Edward Behr) の著書『禁酒法—アメリカを変貌させた13年』(*Prohibition: Thirteen Years that Changed America*)、トーマス・J・アーチディーコン (Thomas J. Archdeacon) が著した『アメリカ人になること—ある民族史』(*Becoming American: An Ethnic History*)、およびキャスリーン・ドラウン (Kathleen Drowne) の『挑戦の精神—禁酒法とジャズエイジの文学、1920年—1933年』(*Spirits of Defiance: National Prohibition and Jazz Age Literature, 1920-1933*) を参照。
 4. 『アーネスト・ヘミングウェイ短編集—ヘミングウェイ・ライブラリー保存版』(*The Short Stories of Ernest Hemingway: The Hemingway Library Collector's Edition*) に収録されたほかのふたつの「賭博師と尼僧とラジオ」原稿結末部においては、フレイザーと細身のメキシコ人との間で、アヘンを巡る対照的な捉え方が浮き彫りになる会話のやり取りの後、細身のメキシコ人が心配そうな様子で、またいつカラ・クカラチャを聴きたいかどうかについて尋ねている。それに対してフレイザーは、“Play the Cucaracha another time. It's better than the radio” (388, 391) と答えて物語自体が終了している。このような彼の発言は、細身のメキシコ人への思いやりに基づくものであるとも考えられる。しかしフレイザーがアヘンのひとつとして認識しているラジオよりも革命の曲を選択しているようにも見えるため、最終的に革命を巡る彼の姿勢については、判然としない状態で残されている。

参考文献

- Archdeacon, Thomas J. *Becoming American: An Ethnic History*. The Free, 1984.
- Baker, Carlos. *Ernest Hemingway: A Life Story*. Scribner's, 1969.
- Balderrama, Francisco, and Raymond Rodriguez. *Decade of Betrayal: Mexican Repatriation in the 1930s*. U of New Mexico P, 2006.
- Behr, Edward. *Prohibition: Thirteen Years that Changed America*. Arcade, 1996.
- Driscoll, Sarah. “Mexicans in Montana: Teaching Hemingway and *Los Betaleberos* in ‘The Gambler, the Nun, and the Radio.’” *Teaching Hemingway and Race*, edited by Gary Edward Holcomb, Kent State UP, 2018, pp. 74-84.
- Drowne, Kathleen. *Spirits of Defiance: National Prohibition and Jazz Age Literature, 1920-1933*. Ohio State UP, 2005.
- Griffin, Peter. *Along with Youth: Hemingway, the Early Years*. Oxford UP, 1985.
- Hemingway, Ernest. *Ernest Hemingway, Selected Letters, 1917-1961*, edited by Carlos Baker, Scribner's, 1981.

- . *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway: The Finca Vigía Edition*. Simon & Schuster, 1987.
- . “The Gambler, the Nun, and the Radio.” 1933. *The Short Stories of Ernest Hemingway: The Hemingway Library Collector’s Edition*. Scribner, 2017, pp. 353-91.
- . “The Revolutionist.” 1925. *Complete Short Stories*. pp. 119-20.
- . *The Sun Also Rises: The Hemingway Library Edition*. 1926. Scribner, 2014.
- . *To Have and Have Not*. 1937. Simon & Schuster, 1996.
- . “Wine of Wyoming.” 1933. *Complete Short Stories*. pp. 342-54.
- ジョン・A・ハードン 『現代カトリック事典』 浜寛五郎 訳. 教文館, 1982.
- カール・マルクス 『ユダヤ人問題によせて ヘーゲル法哲学批判序説』 城塚登 訳. 岩波書店, 2018.
- 国本伊代 『世界史リブレット 122 メキシコ革命』 山川出版社, 2015.
- . 『メキシコ革命とカトリック教会—近代国家形成過程における国家と宗教の対立と宥和』 中央大学出版部, 2009.
- マヌエル・G・ゴンサレス 『メキシコ系米国人・移民の歴史』 中川正紀 訳. 明石書店, 2003.
- Menéndez Mena, Rodolfo. *The Work of the Clergy and the Religious Persecution in Mexico*. Latin American News Association, 1916. 14 Mar. 2020, <https://id.lib.harvard.edu/curiosity/latin-american-pamphlet-digital-collection/43-990060209660203941>.
- 三浦順子 「1920-30年代のメキシコ人移民の『アメリカ人』アイデンティティをめぐる諸問題—テキサスにおける移民政策を通じた人種・階級をめぐる政治の事例より」 『同志社アメリカ研究』 52 (2016): 19-37.
- 中野耕太郎 『20世紀アメリカの夢—世紀転換期から1970年代 シリーズ アメリカ合衆国史③』 岩波書店, 2019.
- Nickel, Matthew. *Hemingway’s Dark Night: Catholic Influences and Intertextualities in the Work of Ernest Hemingway*. New Street Communications, 2013.
- 大垣貴志郎 『物語 メキシコの歴史—太陽の国の英傑たち』 中公新書, 2017.
- Reynolds, Michael S. *Hemingway: The 1930s*. W. W. Norton, 1997.
- . *Hemingway: The Paris Years*. Blackwell, 1989.
- Smith, Paul. *A Reader’s Guide to the Short Stories of Ernest Hemingway*. G. K. Hall, 1989.
- Stoneback, H. R. “In the Nominal Country of the Bogus: Hemingway’s Catholicism and the Biographies.” *Hemingway: Essays of Reassessment*, edited by Frank Scafellla, Oxford UP, 1991, pp. 105-40.
- Warren, Chris. *Ernest Hemingway in the Yellowstone High Country: A Complete Ac-*

count of Hemingway's Work and Adventures in Montana and Wyoming. Riverbend, 2019.

渡辺建夫『メキシコ革命物語—英雄パンチョ・ビリャの生涯』朝日新聞社, 1985.

Whittle, Amberys R. “A Reading of Hemingway’s ‘The Gambler, the Nun, and the Radio.’” *New Critical Approaches to the Short Stories of Ernest Hemingway*, edited by Jackson J. Benson, Duke UP, 1990, pp. 282-87.

(旭川工業高等専門学校)

honjo@asahikawa-nct.ac.jp